

A-II-5

認知音楽療法

—音楽により認知機能の再ネットワーク化を図る—

木沢記念病院 中部療護センター

○奥村 由香, 奥村 歩, 豊島 義哉, 加藤玲子, 篠田 淳

【目的】交通事故による頭部外傷後遺症では、注意や記憶、遂行機能に加え、言語機能、覚醒にも障害がみられ、従来の認知リハビリを行うことが困難な症例を認める。一方、音楽刺激に対する反応は、これら重症例においても残存していることが多い。そこで、われわれは言語機能が損傷された重症例に対し、その残存機能を利用する方法として、音楽を用いて感覚と感情、記憶を統合的に刺激することで認知機能の再ネットワーク化を図る認知音楽療法を試み、その効果を臨床的に評価した。【方法】当センター入院患者のうち、意思疎通が極めて困難な vegetative state(VS)23 例、かろうじて意思疎通が図れる minimally conscious state(MCS) 6 例を対象に、認知音楽療法を 40 分、週 2 回、1 年間継続して行い、音楽療法評価表 (TBI-MTS) で評価を行い、代表症例について音楽療法時に Functional SPECT 検査を行った。【結果】VS23 例中 7 例が MCS に移行し、MCS 例は全例において TBI-MTS の作業記憶が向上した。音楽療法時の Functional SPECT 検査では、メロディ模倣をするようになった VS 症例において右側の第一次聴覚野と上側頭回で 9~10%の血流増加を認め、意欲や人名想起にも改善がみられた MCS 症例において右側の眼窩回、梁下野、視床下部に加え縁上回で 8~13%の脳血流の増加を認めた。【考察】交通事故の頭部外傷により言語機能が損傷された重症例においても音楽を認知する能力は残存している症例を認めた。この残存機能を利用した認知音楽療法では前頭前野の血流量の増加を認め、認知機能の向上に対する効果が示された。認知音楽療法は、認知機能に低下を認める高次脳機能障害、軽度認知障害、うつ病などへの応用が期待できる。